良心の碑と拓本

高橋昌博

1

同志社大学正門を入ると正面に新島襄先生の「良心の碑」が建っている。

良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ　新島　襄

碑陰にはつぎのごとく建碑の主旨が記されている。

新嶋先生同志社大学運動中東京ヨリ在校ノ一学生ニ与ヘタル書簡中ノ一節ヲ録ス先生永眠五十週年ニ際シ追慕ノ余　門生胥議シ之ヲ先生故郷ノ産雅氷石ニ勒ス

昭和十五年十月　蘇峰　徳富正敬書囮

石ハ社友半田善四郎君ノ寄贈ナリ

まさに同志社大学の建学の本旨ともいうべき名碑である。

この碑の拓本の制作について同志社の関係者より依頼を受けたものの、拓本がりっぱに採れるものか内心、心配をしたり、また反面闘志を燃やしたりしたのが、私のいつわらざる心境であった。

ちょうど学校が春休みという好い時期でもあったので、香里高等学校の「良心の碑」の方から拓本を採ることにした。まず三月二十二日朝、同好の士陶芸家の井野祝峰氏宅に集合。大学ならびに香里の碑石を母校に寄贈された校友半田隆一氏のご長男が折よく上洛中で、拓本制作の行をともにすることができた。一行は四名となり、ますますその責任は重大となった。

拓本制作に際してもっとも重要なのが天候である。三月にはまだまだ寒い日が多い。まして相手が石とあってはなおさらである。当日は曇天で少々風が強いので余り良い条件と

はいえない。なだらかな丘陵の上に同志社香里の校舎が見え始めた。近づくにつれて正面にどっかりと据え付けられた碑が、私のファイトを燃やし出した。早速、拓本の制作にかかった。碑面の寸法を測り、紙を切る。は紙必ず碑面より少々大きく余裕を残すことが大切である。紙を節約して、いっぱいに切ると碑の両側を墨で汚す場合があるから常々注意する必要がある。採拓に当って、所有者なり、管理者に拓本の制作について許可を願ったり、また碑はもちろんその周囲をよごさないようにするのは、当然のエチケットである。碑に紙をはり、墨のついた「タンポ」で碑面をたたくと、くっきりと碑に刻まれた文字が現われてくる。簡単なように思われるが、これが仲々大変、「石の上にも三年」とよく諺にいわれるが全くその通りである。

拓本を採り、芝生の上で乾かしている間、拓本の出来ぐあい、墨の濃淡等いろいろと制作上の批判をする。この日の午後、私たちはさらに拓本の制作に取りかかったものの、間もなく雲が急に多くなり、次第に風が強くなってきた。碑面に張る紙に手間どりだしてきた。風は碑面に向って容赦なく吹きつける。井野氏も私も必死である。風の弱った瞬間をみて、手早く紙を張ろうと、あせればあせるほどしくじりが多い。泣きたいほどだ。遂に一枚は失敗に終った。「あせるなかれ」「欲ばるなかれ」この言葉を肝に銘じながら二枚目の拓本にかかった。風の弱ったあいまをみて、要領よく張りつけることが出来たものの、少々紙に「しわ」がよった。この天候で拓本は無理だ。

乾いた画仙紙は強いが、水に濡れた紙は弱いもので、よく注意を怠ると紙を破る場合がある。また水をやる場合、碑面と紙の間に空気がはいってなかなかぬけず、タオルで外側に向って押しても、紙のしわが残る場合が多いので、「良心の碑」のように全紙ほどの大きさのものは、あらかじめ霧吹きのようなもので濡らしておいて（ただし四隅は濡さぬようにしておく）四隅をセロテープでおさえ、中央上部から次第に外側へと水をやる方法が一番よい。

碑面の拓本四枚、碑陰の撰文拓本二枚を採り終え、帰宅の準備にかかった。まず碑面に汚れはないか十分見とどけた後、礎石等周囲の落葉、ちり紙など見ぐるしいものは取り除き、もとのように清掃してから、身の廻り品、道具の点検等忘れ物のないよう心がける必要がある。

2

同志社大学正門の「良心の碑」の拓本は四月十二日朝、有終館前に集合して採った。新学期とはいえ日曜日はさすがに閑散である。学生の出入も少い。

井野氏と私で拓本の制作にかかった。前回の香里の場合と違って、周囲は大きな樹木と煉瓦造りの大学校舎に遮られているため、風あたりは弱く、日当りも余り良くないので紙の乾燥には丁度よい、採拓には好条件であった。ただ一つの難点は碑文が長いため、全紙の画仙紙では丈が短く、少々つながなくてはダメである。全紙よりも長い紙を準備しようと思えば日数もかかるし、かなりの注文をしないと、特別に製造もしてくれないような状態なので断念して、紙を継ぐことにした。紙を継ぐ場合は、どちらの紙も余分に採拓し、表具屋さんに継ないでもらうのが得策である。「タンポ」で碑面の紙をたたく場合、墨の濃淡によって、つぎ目が判然とする場合が

あるから、タンポにぬる墨の量を十分手加減してかからねばならない。今日は案外手順よくことが運び、碑面の拓本三枚、碑陰の撰文拓本二枚を採り終ったのは、午後一時過ぎであった。守衛さんの詰所で手を洗い、お茶をいただいてから拓本の終了と礼を述べ、帰路についた。家に帰り、再び拓本を広げて観賞する時の味は、実際に拓本を採った人でないと味わえない楽しさである。それぞれの拓本に忘れ得ない思い出があり、案外楽しみのある趣味と思う。

3

さらに、五月十日、新島襄先生の墓碑拓本に出かけた。井野祝峰氏とともに若王子墓地へと山を登った。途中外人の親子連れを始め、新緑を求め、山に登る若人のグループにもずい分出会った。樹木のあちこちに小鳥の巣箱が散見されたが、多分、都会から次第に姿を消して行く小鳥のために小中学生の奉仕したものだろう。ひと汗かいて墓域にたどりついた。

以前、田中良一先生に教えられて、外人墓碑に刻まれた「柳の画」の拓本に一度来た思い出がある。新島襄先生の墓前で、今日採拓に来た要旨を報告してから、拓本の制作にかかった。墓石の下部一帯が苔と埃で大変汚れているので、まず清掃に取りかかった。碑面が汚れている時は、よく紙の裏面に「しみ」や埃が色付いて仲々消えない場合がある。それよりも墨をタンポで打つ時、苔が生えていると、水分が苔の中に含まれている関係上、墨が散ったり、ぼけたりして上手に採拓できない場合が多い。清掃のために、水筒に持参した水は全部使った。いざ拓本の制作にかかると水が足りない、肝心の水がなくては問題にならない。ちょうど墓域の西南隅に掃除用のバケツがあったので、井野祝峰氏が山を下り、途中の谷間で水を汲むことになった。山に登る前にバケツにいっぱい水を汲んで登ればなんのことはなかったのに、水はどこにでもあると案外忘れている。これが大失敗の原因だ。山紫水明の京都に住み馴れて水の有難さを忘れている。これが東京での拓本なら、前日から水の準備をしていたかもしれない。私にとっては尊い経験となった。やがて井野氏は大つぶの汗を流しながら水を運んで来た。いよいよ本格的制作にかかった。私が碑面の紙にタンポで墨を打っている間、井野氏が碑陰に紙を張る。手順よく制作が進み、碑面の拓本一枚、同じく下部の英文拓本一枚、碑面の拓本一枚と無事採拓は完了した。勝安芳（海舟）書と碑陰に刻まれている。ともに明治の大先覚者である。緊張の連続であったので、いつもの時より疲れがひどいように感じられた。

墓域の一隅で井野氏とともに昼食をする。休息している間も、同志社の女子学生と思われる若いグループの人々が墓参して、同志社の先覚者のことなど語り合いながら南禅寺の方に下りるコースへと去っていった。午後からは徳富蘇峰先生の墓碑拓本を採る。これで一応、私たちの同志社大学への拓本行は完了したのであるが、新島襄先生を始め同志社関係者の墓碑、あるいは記念碑は全国至る所にあり、なおかつ大学内にも拓本を採りたいものが数多くあり、機会を得てさらに拓本の制作を行ない、同志社史の一ページにこの拓本を飾りたいと存じています。

（京都拓影研究会）